

高等学 校

平成22年度

教育研究員研究報告書

国語部会

東京都教育委員会

はじめに

東京都教育委員会は、平成22年度から新たに幼稚園・小学校・中学校・高等学校の教員を対象に教育研究員を設置し、平成17年度まで50期にわたって行ってきた教育研究員事業を6年ぶりに復活させました。この事業は、教育研究活動の中核となる教員を養成することによって、東京都全体の教育の質を向上させることを目的としています。各教育研究員には1年間の研究活動を通して組織的な研究活動の在り方を身に付け、これからの東京都の教育研究活動の推進者となることが期待されています。

平成20年3月に告示された幼稚園・小学校・中学校学習指導要領に続き、平成21年3月に高等学校学習指導要領が告示され、全ての校種が新しい学習指導要領の本格実施あるいは本格実施に向けての移行期間に入りました。このことを受けて、平成22年度の教育研究員の共通テーマは「新学習指導要領に対応した授業の在り方について」とし、研究の柱が改訂された学習指導要領であることを明確にしました。また、今回の学習指導要領改訂の大きなポイントの一つである「言語活動の充実」については、全ての校種・部会の研究内容の中で取り組むこととしました。

これまで都教育委員会は、都立高校教育の充実・発展のために「生徒による授業評価」を活用した授業改善の促進や、進学指導重点校等での進学指導に関する協議会の開催など、生徒の学力を向上させるための取組を行ってきました。また、平成22年度からは、進学指導のマネージメントの定着を図る目的で、進学校における外部機関による進学指導診断を実施したり、学力向上に向けて実践的な研究を行う学校を指定し、高校入試結果の分析、学力向上推進プランの作成、学力調査問題の開発・実施・分析を通して学習指導の改善と充実を図ったりしてきました。

そこで、本年度高等学校の各部会においては、全校にわたる共通テーマに加え、「確かな学力の向上を図るための授業等の工夫についての実践研究」を高等学校全体のテーマとして設け、各部会において確かな学力を定義づけた上で、それぞれの研究主題を設定し、研究開発に取り組んできました。

この1年間、高等学校の全15部会、70名の教育研究員が、国語、地理歴史、公民、数学、理科、保健体育、芸術（音楽）、外国語、家庭、情報、農業、工業、商業、特別活動及び総合的な学習の時間の各教科等について、研究主題に基づいて研究を行い、協議を重ね、検証した内容を本報告書にまとめました。

各学校におかれましては、本報告書を有効に活用し、学力向上に向けた教科等の指導方法・内容の改善と充実に取り組んでいただくようお願いします。

平成23年3月

指導部高等学校教育指導課長

宮本 久也

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	2
III	研究の仮説	3
IV	研究の方法	4
V	研究の内容	5
VI	研究の成果	12
VII	今後の課題	16

研究主題	「主体的な言語活動を通じて、自己の言語感覚を磨き伝え合う力を高める授業の在り方について」
-------------	---

I 研究主題設定の理由

1 社会の現状

新しい高等学校学習指導要領において国語については、言語教育としての立場を一層重視し実生活で生きてはたらし、各教科等の学習の基本となる国語の能力を身に付けさせること、言葉を通して的確に理解し、論理的に思考し表現する能力や、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成すること、我が国の言語文化に触れて感性や情緒を育むことを大きな目標として掲げている。

言語情報の量的拡大と質的变化が進む中、国語教育において言語に関する能力を生徒に習得させることに対する社会的な要請は高まっている。また一方で、言語に関する能力は、知的活動、感性や情緒、コミュニケーションの基盤でもあり、生涯を通じて個人の自己形成に関わるとともに、文化の継承や創造に寄与する役割を果たすものである。高等学校国語では、社会人として必要とされる国語の能力の基盤を確実に育成することを重視する必要がある、広く社会生活全般を視野に入れた指導が欠かせない。もちろん、これらは学校全体の共通理解のもと、全教科が協力しながら進めることが重要である。しかし、その中でも言語に関する能力を育成する中核の教科として、国語科の果たす役割と責任は極めて大きいものである。

2 生徒の現状

新しい高等学校学習指導要領解説国語編冒頭の記述（「PISA調査など各種の調査の結果からは、我が国の児童生徒については、例えば、①思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題、②読解力で成績分布の分散が拡大しており、その背景には家庭での学習時間などの学習意欲、学習習慣・生活習慣に課題、③自分への自信の欠如や自らの将来への不安、体力の低下といった課題、が見られるところである。」）に見られるように、日本の高校生には思考力・判断力・表現力、知識・技能を活用する力に課題があることが指摘されている。また、読解力に関する成績分布において、他の成績上位国に比べて下位の生徒層が厚く、学習意欲や学習習慣・生活習慣に関して課題があると指摘されている。

さらに、同じく解説国語編の中で繰り返し「学び直し」に言及しているように、漢字の読み書きや語彙など基礎的・基本的な知識・技能に関しても、学校間・生徒間でその定着状況に差があり、学び直しの工夫が求められている。

現代は情報通信技術の発達、携帯電話やインターネット等の普及により、コミュニケーションの質が大きく変化しつつある。相手の反応とは関係なく自分の考えを一方向的に発信し、場に応じた言葉の選択や相手の心情を押し量り、適切に対応しようとする意識の低下や、身近な友人同士だけで通じる若者言葉の氾濫や敬語の誤用といった言葉の乱れなど、生徒を取り巻く言語環境において数多くの問題が挙げられている。そうした現状において、生徒に社会人として必要な国語の能力の基礎を確実に身に付けさせることがますます強く求められて

いる。事実を正確に理解し、相手の立場を考慮しながら的確に分かりやすく伝える力、他者との対話や議論によりお互いの考えを深めていく力の定着を目指さねばならない。

3 主題設定の理由

高等学校国語部会でまず着目したのは「伝え合う力」である。高等学校学習指導要領解説国語編に、「『伝え合う力』とは、人間と人間との関係の中で互いの立場や考えを尊重しながら、言語を通して適切に表現したり的確に理解したりして、円滑に相互伝達、相互理解を進めていく能力のことである。国際化や情報化など、変化の激しい現代社会では、一人一人が良好な人間関係づくりや健全な社会づくりに積極的にかかわろうとする意欲や態度が特に求められる。言語の教育の立場に立つ国語科としては、『伝え合う力』を高めることを通して、そのような意欲や態度を育成していくことになる。」とあり、「伝え合う力」の定義とともに現代社会における「伝え合う力」の重要性が述べられている。生徒の現状に鑑み、高等学校国語部会では、「伝え合う力」を高める工夫について考察した。

「伝え合う力」とともに着目したのは「言語感覚を磨く」ことである。同じく高等学校学習指導要領解説国語編で「言語感覚を磨く」とは、「言語活動における表現と理解との具体的な場面を通して、目的や場に応じた言葉の適切さや美しさについての感覚を洗練し、表現の効果について吟味し、適切な判断ができるようにすることである。」と定義されている。高等学校国語部会では、「言語感覚を磨く」ことは「伝え合う力」を高める上で重要な学習活動であると考えた。

さて、平成 22 年度教育研究員では、全校種全教科を通して「新学習指導要領に対応した授業の在り方について」を共通のテーマとして、言語活動を取り入れた授業の在り方についての実践研究を行うこととされている。高等学校国語部会では「言語感覚を磨く」言語活動が、「活動あって学習なし」という状況に陥らないよう、目的意識、相手意識、場面・状況・条件意識、などを生徒に認識させ、生徒が主体的・積極的に言語活動を行えるような授業の在り方を考えていくこととした。

以上により、高等学校国語部会では「主体的な言語活動を通じて、自己の言語感覚を磨き伝え合う力を高める授業の在り方」を研究主題とし、研究を進めることとした。

Ⅱ 研究の視点

1 確かな学力の育成

平成 22 年度教育研究員高等学校部会の各教科では「確かな学力の向上を図るための授業等の工夫についての実践研究」を共通テーマとしている。「確かな学力」とは、学校教育法第 30 条及び学習指導要領第 1 章第 1 款に規定されているいわゆる学力の 3 要素（①基礎的・基本的知識及び技能、②これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力、その他の能力、③主体的に学習に取り組む態度）に基づく学力である。

国語における「確かな学力」について、高等学校国語部会では国語の学習事項を学力の 3 要素に当てはめて考察し、①漢字の読み書きや語彙など、基礎的・基本的知識・技能、②身に付けた知識・技能を活用して、文章を的確に読み取り、思考・判断し、自分の考えを適切に

表現する力、③様々な言語文化に対する興味・関心をもち、進んで言葉に触れ、伝え合う力を高めようとする態度、とした。

2 主題設定の視点

「確かな学力」を主題設定の視点で見ると、「伝え合う力」を高めるためには、まず、漢字の読み書きや語彙など基礎的・基本的知識及び技能を身に付けた上で、それらを活用し言語感覚を磨くことが必要である。相手、目的に応じて、言葉の正しい意味に基づきながら意識的に使い分けたり、ふさわしい語句を選んで場にふさわしい表現にしたりすることができる。ではじめて、思いを伝え合うことができるからである。

また、これらは、様々な言語活動を行う中で必要性を実感していくものでもあり、絶えず習得し補完していかなくてはならないものでもある。生徒の興味・関心、学習意欲を喚起するような言語活動の場を提供し、生徒が主体的に取り組むことによって言語感覚をより効果的に磨くことができると考えられる。

Ⅲ 研究の仮説

1 仮説設定の方向性

「Ⅱ 研究の視点」に基づき、「研究の仮説」について次のような方向性を確認した。

- (1) 伝え合う力の育成に向け、生徒が習得している基礎的・基本的知識及び技能を活用し言語感覚を磨く授業の在り方を工夫する。
- (2) 指導事項にふさわしい言語活動を設定し、何のために（目的意識）、誰に対して（相手意識）、どのような場面や状況で行われているのか（場面・状況意識）、を明確に認識させるような言語活動について考察する。
- (3) 生徒の学習意欲を喚起し、生徒が積極的・主体的に学習活動を行えるよう、課題やテーマ、教材等の設定または選定などを工夫する。

2 仮説の設定

上記の方向性により、次のような仮説を設定した。

- (1) 語彙等の基礎的・基本的知識・技能を身に付ける習得型の学習活動と習得した語彙を使いこなすとともに他者の表現から学ぶ活用型の学習活動の両者をバランスよく行うことによって言語感覚を磨くことができる。
- (2) 他者の立場や考えを尊重しつつ自己の考えをもち、根拠を明確にして表現する学習活動や自己の表現に対して評価を受けることができる学習活動を行うことによって、伝え合う力を高めることができる。
- (3) 目的・相手・場面等の明確化、生徒の興味を喚起する教材の選定や補助資料の活用、学力向上への動機付けが可能となるような評価、などの工夫によって、生徒の学習意欲を向上させ、主体的な言語活動をさせることができる。

Ⅳ 研究の方法

1 研究の方法

研究主題に則して、授業の具体的な在り方に関する実践的研究を行う。

仮説に関する具体的方策について部員が各高等学校における実践等を持ち寄り、合宿等での集中協議を活用して模擬授業を行うなどの方法で検証し、検証授業の指導案を作成する。さらに、検証授業（実践事例）を行い、単元終了後にアンケート調査を実施し、検証授業及び本研究における成果と課題をまとめる。

2 具体的方策

(1) 指導事項

「伝え合う力を高める」ことを目標としているため、新学習指導要領「国語総合」の「A 話すこと・聞くこと」の指導事項「ア 話題について様々な角度から検討して自分の考えをもち、根拠を明確にするなど論理の構成や展開を工夫して意見を述べること。」と「B 書くこと」の「イ 論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめること。」の二つの指導事項から単元の構成を検討することとした。

(2) 手法1（話すこと・聞くこと）

「A 話すこと・聞くこと」の言語活動例「ウ 反論を想定して発言したり疑問点を質問したりしながら、課題に応じた話合いや討論などを行うこと。」に基づく言語活動を行うことを想定し、模擬討論を行い、次のような手法を取り入れた話し合いや討論を行うこととした。

グループワークや発表活動など体験的な学習の場面を多くする。また、ゲーム性をもたせて生徒の興味・関心を喚起しつつ、ディスカッションなどを通じて自己の表現と他者の表現とを比較する機会が与えられる学習活動を展開する。

(3) 手法2（書くこと）

「B 書くこと」の言語活動例「ウ 相手や目的に応じた語句を用い、手紙や通知などを書くこと。」に基づく言語活動を行うことを想定し、持ち寄った手紙文、通知文、新聞記事やコラム、投書、などを読み合い、次のような手法を取り入れた学習活動を行うこととした。

語彙を身に付ける習得型の学習の後に、教材本文をリライトさせるなどの活用型の学習を行う。また、リライトした文章に対する相互評価等を実施し、他者の表現から学ぶとともに自己の表現が他者にどのように受け止められているのかを知る機会を与える。

(4) 教材

上記(2)・(3)の検証に基づき、教材については次のような観点で選定・提示することとした。

実生活につながる教材を用いたり、自己の体験と関連付けられるよう補助資料を用いたり、身近な課題としてとらえられるような教材の選定や資料提示を行う。

具体的には教科書教材「仮想化する現実社会」を使用することとし、現代社会におけるメディアやコミュニケーションの問題について、自己の人格と他者との関わりに関する身近な話題を基に考えさせる。

また、発展教材として、ネット人格に関する新聞記事を例示し、教科書教材によって提起された課題について更に深く考えさせる。

V 研究の内容

1 研究構想

全体テーマ **新学習指導要領に対応した授業の在り方について**

高校部会テーマ **確かな学力の向上を図るための授業等の工夫についての実践研究**

教科等の新学習指導要領のポイント

- 言語の教育としての立場を一層重視し実生活で生きてはたらし、各教科等の学習の基本となる国語の能力を身に付けさせること。
- 言葉を通して的確に理解し、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成すること。
- 我が国の言語文化に触れて感性や情緒を育むこと。

教科等における確かな学力とは

- 漢字の読み書きや語彙など、基礎的基本的知識・技能
- 身に付けた知識・技能を活用して、文章を的確に読み取り、思考・判断し、自分の考えを適切に表現する力
- 様々な言語文化に対する興味・関心をもち、進んで言葉に触れ、伝え合う力を高めようとする態度

現状と課題

- 各種調査の結果から、思考力・判断力、表現力、知識・技能を活用する力などに課題があることが指摘されている。
- 各種調査の読解力に関する成績分布において、他の成績上位国に比べて下位の生徒層が厚く、学習意欲や学習習慣・生活習慣に関して課題があると指摘されている。
- 基礎的・基本的な知識・技能に関して、学校間、生徒間でその定着状況に差があり、学び直しの工夫が求められるとともに、社会人として必要な国語の能力の基礎を確実に育成することが求められている。

国語部会主題

主体的な言語活動を通じて、自己の言語感覚を磨き伝え合う力を高める授業の在り方について

仮説

- 語彙等の基礎的基本的知識・技能を身に付ける習得型の学習活動と習得した語彙を使いこなすとともに他者の表現から学ぶ活用型の学習活動の両者をバランスよく行うことによって言語感覚を磨くことができる。
- 他者の立場や考えを尊重しつつ自己の考えをもち、根拠を明確にして表現する学習活動や自己の表現に対して評価を受けることができる学習活動を行うことによって、伝え合う力を高めることができる。
- 目的・相手・場面等の明確化、生徒の興味を喚起する教材の選定や補助資料の活用、学力向上への動機付けが可能となるような評価、などの工夫によって、生徒の学習意欲を向上させ、主体的な言語活動をさせることができる。

具体的方策

- 手法1（話すこと・聞くこと）…グループワークや発表活動など体験的な学習の場面を多くする。また、ゲーム性をもたせて生徒の興味・関心を喚起しつつ、ディスカッションなどを通じて自己の表現と他者の表現とを比較する機会が与えられる学習活動を展開する。
- 手法2（書くこと）…語彙を身に付ける習得型の学習の後に、教材本文をリライトさせるなどの活用型の学習を行う。また、リライトした文章に対する相互評価等を実施し、他者の表現から学ぶとともに自己の表現が他者にどのようを受け止められているのかを知る機会を与える。
- 教材…実生活につながる教材を用いたり、自己の体験と関連付けられるよう補助資料を用いたり、身近な課題としてとらえられるような教材の選定や資料提示を行う。
- 評価…発表活動後は自己評価と相互評価を行う。また、単元終了時に評価後の改善に対する再評価を行う。
- 応用…上記については、古典及び近代の文学や抽象度の高い評論などを扱う場合、学校や生徒の様々な実態などを想定し、汎用性を考慮しながら研究を進める。

2 実践事例

(1) 実践事例

科目名	国語総合	学年	2 学年
-----	------	----	------

1 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

単元名：身近な話題に関する自分の考えを伝え合うこと

使用教材：「仮想化する現実世界」（『国語総合 改訂版』教育出版）

2 単元（題材）の指導目標

- ・ 現実社会の問題を身近なものとして理解し、自他の関わりについて考える（関心・意欲・態度）。
- ・ 他者の価値観を踏まえ、自己の意見（考え）を、相手や目的、場に応じて効果的かつ的確に伝える力を身に付ける（話す・聞く能力）。
- ・ 伝え合い活動を通じて、他者の存在を意識し、場に応じた表現力を身に付け、また、その表現力の重要性を認識する（書く能力）。
- ・ 文や文章の組み立て、語句の意味、用法及び表記などを理解する（知識・理解）。

3 評価規準

	ア 関心・意欲・態度	イ 話す・聞く能力	ウ 書く能力	オ 知識・理解
単元の評価規準	①題材について自分の意見を持ち、他者に伝える意志を持って整理しようとしている。 ②自分の考えを目的に応じた内容にリライトしようとしている。 ③他者の考えを理解し、観点に沿って評価しようとしている。 ④話し合いにおいて、自他の意見を考え合わせて、課題の解決や思考の深化を図ろうとしている。	①グループ内での話し合いにおいて、自分の考えを的確に述べ、他者の考えを的確に聞くことによって、意見を深め、整理している。 ②発表をするときに、相手を意識し、話し方を工夫して分かりやすく伝えている。 ③発表を聞く際に、話題、話し手の意図、組み立て方、強調点などをとらえ必要なことを聞き取っている。	①自分の意見をまとめ、論拠を明確に表現している。 ②自分の意見を明確に示し、論理的な構成を工夫した文章を書いている。 ③適切な語句を選び、相手や目的に応じた効果的な表現で書いている。 ④違った立場の意見を認め、他者の意見と自分の意見の違いを認識し、意図的にリライトに活用している。	①文や文章の組み立て、論理的な文章展開の型を理解している。 ②語句の意味、用法及び表記などを理解し、語彙を豊かに身に付け、表記に関する知識や技能を身に付けている。

4 単元（題材）の指導計画（8時間扱い）

時間	学習内容	学習活動	評価規準（評価方法）
1 2 3 4	「仮想化する現実世界」の学習 ・ 本文通読 ・ 内容理解とまとめ	・ 導入プリントの問題を解き、範読を聞く。 ・ 読みと語句の意味の確認、段落分けを行う。 ・ 設問に答えながら、各段落の内容をまとめる。 ・ 全体の内容と構成をまとめる。 【指導上の留意点】 ・ 現在の社会と過去の社会を比較させる。 ・ 現在の物理的制約の変化を理解させる。 ・ バーチャルな場の拡大による個人化の進展と人格の統一性について理解させる。	・ アー① （発言の内容・行動の観察） ・ オー①② （発言の内容・記述の確認）

5	<p>自己の意見をまとめる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ネット人格に関する新聞記事を参考資料とし高度情報化社会における人格の統一性について考えを深める 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ネット上の人格に対する名誉毀損裁判の事例〈裁判A〉〈裁判B〉を読み、それぞれについて自己の意見をまとめ判断し、仮想判決を下す。 ・ 判決内容は、「無罪」「有罪（軽・重）」の三段階からそれぞれ選択する。 ・ 判断理由をプリント①（自分を含むグループ内の意見を集約し発表意見にまとめるワークシート）にそれぞれ記入する。 <p>【指導上の留意点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 何のために行うのかという認識（目的意識）を明確にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ アー①／ウー①（行動の観察・記述の確認）
6 本時	<p>グループ協議 発表 相互評価①</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 同じ選択をしたグループに分かれ、それぞれの意見について話し合い、プリント①に記入する。 ・ 各グループ内で意見をまとめ、発表する。 ・ 発表を聞きながら、プリント②（他のグループの意見をメモし、観点毎に評価するワークシート）を用いて、相互評価を行う。 <p>【指導上の留意点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 誰に対して行うのかという認識（相手意識）を明確にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ アー④／イー①（行動の観察・発言の内容・記述の確認） ・ アー③（発言の内容） ・ イー②③（発言の内容・記述の確認）
7	<p>自己の意見のまとめ直し リライト作業</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前時の学習を踏まえ、論理的な視点から自分の意見を見直し、文章を推敲する。 ・ 「裁判における評議」という場面設定をし、そのための準備として「意見説明の台本」を書くという想定で文章を書き直す。 ・ 「語彙シート」（使用が予想される語の用語集）を活用し、文章を書く。 ・ 前時に聞き取った他者の意見の中で、反論できるものを有効に活用し文章に取り入れ、自分の意見を強める。 ・ リライトした文章に対して、相手や場面に応じた適切な表現となるよう添削や助言を受け、文章を改良する。 <p>【指導上の留意点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ どのような場面や状況で行われているのかという認識（場面・状況意識）を明確にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ アー①②（行動の観察） ・ ウー①②③④ エー①②（記述の確認）
8	<p>読み合わせ 相互評価② 自己評価</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全員の書いた「意見説明の台本」を読み合い、「主題・内容」「構成」「表現・語彙」の観点から、他者の文章を5段階で評価しコメントを記入する。 ・ 4段階による自己評価を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ オー①②（記述の確認） ・ アー②（行動の観察・記述の確認）

5 本時（全8時間中の6時間目）

(1) 本時の目標

- ア 身近な話題としての認識をもち、主体的・積極的に授業に参加する中で、物事を客観的にとらえる姿勢を身に付ける。（興味・関心・態度）
- イ グループワークを通じて、自己と他者との共通点・相違点を見出し、様々な価値観があることを認識する。（話す・聞く能力）
- ウ 客観的な視点で相互評価し合うことにより、自己の意見の論理性を高める手立てとする。（書く能力）

(2) 本時の展開

過程	時間	学習内容 学習活動	指導上の留意点	評価規準 (評価方法)
導入	5	・前時の振り返り ・グループ分け	・前時に記入したプリント①の内容を確認させる。 ・本時の活動の趣旨説明を行う。 ・同じ選択をした者同士のグループに分ける。(1グループ3～4人とする。同じ選択の者がいなければ、1～2人となる。)	
展開1	15	・各グループ内で意見交換を行う。 ・発表のための準備を行う。	・話し合い活動は、一人で意見をまとめられない生徒への支援としての意味合いを持つ。また、別の視点からの考え方もあることを知る機会となる。 ・発表の準備では、プリントにチェックを入れる形、番号をふる形、別の紙にまとめる形等、形式は問わない。	・ア－④・イー① (行動の観察・ 発言の内容・ 記述の確認)
展開2	25	・グループで話し合った内容を発表する。 ・各グループの発表を聞き、評価を行う。	・発表者には、同じ内容で2回説明させる。 ・違う判断をしたグループの意見を聞くことにより、様々な価値観があることを理解させる。 ・評価は、「観点別」と「コメント欄」に分けたプリント②を用いて行う。各発表で評価記入の時間を確保する。 【評価をさせるうえでの留意点】 ・観点別に5段階で評価を付けさせる。 ・発表者の意見の内容を聞き取って書かせる。 ・賛同と異議を整理しコメントを記入させる。	・イー②③ ・ア－③ (発言の内容・ 記述の確認)
まとめ	5	・本時の振り返り	・プリント②を再度確認させ、チェック項目が次時の活動における留意点になっていることを理解させる。	

6 本時の振り返り

(1) グループの話し合いについて

選択する意見が分かれ、多様なグループ分けができた。結論が同じであっても、根拠が異なるもの同士で話し合うことで複数の多角的な視点をもつことができ、意見の深化と根拠の補強がなされていた。

しかし、同じ選択の生徒がいなかったり、根拠が浅く似通っていたりするため、意見がなかなか深まらないグループがあった。指導者からの柔軟な指導・助言で意見の深まりをつくることができるかどうか課題である。

(2) 発表について

発表において、他の発表者の語彙をうまく取り入れて論理性を高める努力をした生徒が複数いた。発表を取り入れたことで、まとめる段階で聞き手を意識させることができた。発表は、同じ内容を2回繰り返して説明させるという形で行った。説明を2回繰り返すことで、発表者自身で意見をよりよくまとめて伝えることができていた。また、聞き取る側には、1度目に観点別評価、2度目には内容の理解と相違点の抽出を意識させた。そのことが主体的な聞き取りと詳しい理解につながった。

(3) 相互評価について

ワークシートの工夫により評価項目を分けて書き込ませたことは、聞き取り方の意識付け

ができ、大変効果的であった。聞き取る能力や、聞き取った内容を整理して書き込む能力に個人差があり、複合的な作業が困難な生徒もいた。うまく聞き取れない生徒、聞き取った内容を書き込めない生徒に対する時間内での指導については、更なる改善の余地がある。

観点を設けて他者の意見を評価することにより、発表者の説明の中で使用される語彙や表現の方法に対して聞き手が刺激を受けていた。また、自分の意見との相違点を意識して聞かせることにより、異なる判断をした根拠とその発想や感性、価値観や視点の違いに対して自分の意見と照らし合わせて大きな刺激を受けていた。

(4) 本時の検証

生徒には、発表や評価の目的、意見を伝える相手、それぞれが明確に意識されており、本時の学習活動は伝え合う力を高めるための言語感覚を磨く活動として有効であった。

7 アンケート結果等の分析

(1) アンケート結果

今回提案した単元では、単元終了後「振り返りシート」という形での自己評価を行わせた。教員が設定した項目に対する4段階での評価とともに、「相互評価」「自分の語彙力」「今回の学習」という項目を設定し、コメント欄を設け、自分の意見（感想）を書かせた。生徒から挙げた意見を教員側でまとめたものを以下に紹介する。

ア 語彙力について

- ・自分の語彙力不足を実感し、その必要性を感じた。

イ 伝え合い活動について

- ・色々な意見を楽しむことができた。
- ・自分の価値観から「自分の意見」が生まれ、それをよりよく伝えるための多様な力を様々な活動の組み合わせによって使っている実感をもてた。
- ・意見の違いには、価値観や立場、感覚の違いが大きく反映していることに気が付いた。異なる価値観や立場、感覚の相手に自分の意見を伝えることは難しいが、伝わった時のやりがいや達成感を得ることができた。
- ・伝え合いの活動を深い次元で行うことができた。思い込みで発言をすると間違っって伝わること、根拠が浅いと説得力がなくなってしまうことなどを経験し、より正確に伝えることや根拠を掘り下げることの重要性を実感できた。

ウ リライトについて

- ・公的な言葉、普段使わない表現を努力して使う経験が有意義であった。
- ・自分の意見を詳しく伝えようという意識をもつことで、今まではほとんど書けなかったような長い文章をまとめることができた。

エ 相互評価について

- ・自分の意見と他者の意見を比べることが刺激になった。
- ・「相手の意見を大切にする」という意識をもつことができた。
- ・伝他者の意見を用いて自分の意見を補強することが、文章構成力につながることを実感できた。

(2) ワークシートやリライト原稿の分析

今回の授業では、ワークシートにより段階的に学習できるよう工夫した。それぞれの段階におけるワークシート等を分析すると、以下のような変化が見られた。

ア 多様な語彙の使用

初期には、話し言葉や、生徒自身が日常の生活で使用する語彙だけで意見を書く生徒がほとんどであったが、設定された場面を意識してまとめ直し、リライトする中で、これまでには使っていない語彙、難易度の高い語彙を使って意見をまとめる努力をしていた。語彙集のプリントを活用させる手法も効果的であった。積極的に質問する生徒も多く、授業者からの助言や添削を加えていった。

「だましている」を「偽っている」、「どっちもどっち」を「双方に罪がある」、「自分だけで考える」を「主観的に判断する」と部分的に言い換えたり、「(ネット上で性別を偽っている被害者も)人をだましているから相手だけ悪いというのはおかしい」を「中傷について加害者に罪はあるが、被害者側にも性別を偽ったという非があるため、100%の損害賠償とはならない」というように一文全体の表現を言い換えたりと、生徒が自主的により適切な表現へと書き直していった。生徒が新たな語彙を活用し、適切な表現を探り、語彙力の必要性を実感したという点は、今後にもつながる経験となった。

イ 他者を意識した伝え合い

他者の説明を多く聞き、相互評価を経てリライトする中で、生徒は他の様々な価値観から意見が生まれることを知るとともに、土台となる価値観が異なる相手に正しく意見を伝えることの難しさを実感していた。その実感を通じて、構成を組み立ててわかりやすく伝えることや、土台となった自分の価値観を伝えた上で意見を表明することなどを意識的に行うことができていた。

「(ウェブサイトの)管理人はほとんど悪くない」を「トラブルなく利用することができるなかった利用者たちの問題であり、管理人の罪をこの裁判で取り上げることは適切ではない」、「ネット上でも同じような問題だ」を「ネット上でも人格を否定したことは事実であり、その行為自体には罪がある」と書き換えるなど、初期には感情的・感覚的に書いていたものが、意見を整理して伝えようと変化していった。伝え合いにおいては、相手の立場に立って相手が理解できる表現をすることや、相手が自分と同じ価値観だとは限らないという前提で正しく伝えようとするのが大切であると、生徒は体験の中で理解していった。

ウ 説得力向上の工夫

生徒たちは意見交換をする中で、自分の価値観から沸き起こる意見を伝えたいという積極性をもつようになり、それが説得力のある文章にリライトすることへの強い意欲につながった。意見を整理してきちんと文章を構成する、他の価値観の存在を意識して客観性のある論理的な表現を用いる等、授業者の提示する段階的な手法を活用して各自が説得力を高める努力をしていた。

自分と異なる意見への反論を盛り込んだ上で自分の意見を主張するという段階では、初めは「管理人が悪いっていうのはなんか違う。」と書いていたものを「元の訴えの趣旨から外れている。」「この裁判は、まず当事者の問題として捉えるべきで、管理人の責任問題については別件として扱うべきだ。」などの表現に書き換える等、反論を予測して自分の意見

を述べようとするのが、自分の意見を深めていく手段としても有効なものになっていた。生徒はリライトした自分の文章を改めて見ることで説得性の変化を実感していた。これらの活動を通じて、各自が説得力の向上に必要な要素をつかめたのではないかと考える。

8 今回の実践における単元としての成果と課題

(1) 教材・話題について

生徒にとって身近な「インターネット社会における問題」を取り上げているという点で、話題に対する興味関心を生徒から引き出すことができていた。教材を通して、日常生活や社会生活を見つめる視点をもたせることができ、それに対する意見をもつことによって、判断の根底に各自がもつ価値観や視点があることにも気付かせることができた。

普段はおとなしく、自分の意見を他の生徒の前で表現することを避ける傾向の強い生徒が多いのだが、発表した生徒はいずれも自分の意見を明確に述べており、主体的に活動を行っていたものと考えられる。

(2) 授業の形態・手法について

能力を複合的に活用する学習内容が多く、「説明する」「聞き取りメモをする」「語彙を増やす」「文章表現をする」等それぞれの能力について、生徒の中での能力差が大きい。そのため、個人差はあるものの、個々に伸びは見られ、ねらいは概ね達成されていた。

リライト時には、個々に添削とアドバイスをする段階を設け、改善して再度書かせ、よりよい表現にするための方法をつかませた。「個人作業」と「グループ作業」を段階的に組み合わせることによって、グループ内での高め合いと、他のグループの説明による高め合い、そして、最終的に自分の意見を構築し、他者への説明のためにリライトするという、自己と他者を意識させる活動をさせることができた。

ワークシートによって段階的に意見を構築できるように導き、他者への反論を取り入れ、説得力を高めさせたことで、構成を意識して他者に意見を伝える文章を書かせることができた。また、語彙シートを使わせることで、より難易度の高い文章を書く意識付けができた。意見を書く際に必要とする語彙や、使わせたい語彙を増やし、充実させることによって語彙についての刺激をより多く与えることができた。

今回は、少人数制の授業における実践であったため、全グループの発表や、全員での相互評価が可能であった。40人学級における授業の手法については、さらに汎用性のあるものに改良する必要がある。

(3) 評価の工夫について

「話すこと・聞くこと」「書くこと」それぞれの活動の中で相互評価を行ったことで、自分の意見を深める活動と、他者の意見に興味をもって読み込む活動ができた。評価の観点を設け、生徒同士で相互にその観点で他者の意見を見るという活動は、生徒に自分と異なる多様な価値観や視点の存在を意識させることができ、大変刺激のある活動であった。

また、印象による評価や感想ではなく、意見を深め合い、考え方や価値観の相違点への考察をし、自分の意見に生かすという建設的な活動となったことは、大きな成果であった。特に、自分の意見をもった生徒は、他者の意見を読み込むことに大変積極的で、より説得力のある他者の説明文からは大きな刺激を受けていた。そして、そのことが自己評価における自

己の能力や価値観への気付きにもつながった。

(4) 結果に対する考察

生徒にとって身近な題材を提示し、ゲーム性を兼ね備えたワークシートや生徒の語彙力不足を補う語彙集を用いるなど、授業展開の工夫を行ったことにより、生徒は学習活動に主体的、意欲的に取り組むことができた。また、段階を追った授業展開を行うことにより、生徒は自身の語彙力、表現力を意識し、見つめ直すことができたようである。

「伝える」という行為は、それぞれが一方向的に意見を投げつけ、一瞬一瞬で関係が途切れてしまうものではなく、お互いが相手の存在を認め、相手に伝わって初めて成立するものであるという認識を生徒はもつことができたようである。こういった単元を系統付けて行っていくことで「伝え合う」という力を磨いていくことができれば、近年重要視されている「コミュニケーション能力」も培われていくと考える。

(5) 生徒の変容とねらいの達成について

アンケート結果から、生徒が話題に対する様々な意見を楽しみながら、自分の意見を深めていった様子がうかがえる。これまで教材に対して受身で感想や印象のみに終わりがちであった生徒が、題材に対して興味をもち、自分の意見を伝えたい、また、他者の意見を聞いて自分の意見と比較したいという強い意欲をもって活動に臨み、自分の意見を明確にしていたことは大きな変化であった。それが活発な意見交換や、より正確かつ詳細に伝えるための個々の努力につながった。

意見説明文を書く活動においては、ただ自分の意見をまとめるのではなく、他者の意見を意識して自分の論を構成するという視点や、よりよい表現のために語彙を選択するという意識をもたせることができた。よりよく意見を伝えるためには、その相手や場面を意識して適切な表現をする能力が必要であることを実感している様子がアンケート結果から読み取れる。

そして、その中で生徒は、各自の語彙力とその必要性についても実感し、「もっと本を読もう。」という感想が出る等、今後の語彙力を高めるための意欲をもつ生徒が多くいた。また、完成させた意見説明文を初期の意見文と比較して自己評価した生徒たちは、新しい語彙を使った表現活動での達成感を得ていた。このように、本活動の中で他者との高め合いを通して「自己の言語感覚を磨き伝え合う力を高める」というねらいを達成できたことは、生徒個々の自信や、今後の学習意欲向上にもつながるものとなった。

(6) まとめ

実践事例として実践・検証できたのは、上記実践事例のみである。したがって、以下に述べる研究の成果は上記事例による仮説の検証と事例の活用に関する提案とする。

VI 研究の成果

1 仮説の検証

- (1) 語彙等の基礎的・基本的知識・技能を身に付ける習得型の学習活動と習得した語彙を使いこなすとともに他者の表現から学ぶ活用型の学習活動の両者をバランスよく行うことによって言語感覚を磨くことができる。

今回の実践事例の中では習得型の学習活動だけを取り上げた場面はないが、「語彙シート」を用いてリライト作業をさせることで、活用型の学習を通じて語彙を習得させることにつながった。また、生徒がグループワークや発表活動、相互評価等を通じて言語感覚を磨いている様子がアンケート結果やリライト後の原稿から読み取れる。

今回の事例では、事前に習得しておくべき基礎的・基本的知識及び技能はすでに習得されているものが多いため、言語活動の中で習得型の学習活動を補足的に行った。しかし、古文・漢文、あるいは、近代の文章や抽象度の高い評論などを扱う場合には、年間の指導計画の中に適切に位置づけ、事前に十分な基礎的・基本的知識及び技能を習得させた後に活用型の学習活動を行わなければ十分な成果は出ない。大切なのは両者のバランスである。

(2) 他者の立場や考えを尊重しつつ自己の考えをもち、根拠を明確にして表現する学習活動や自己の表現に対して評価を受けることができる学習活動を行うことによって、伝え合う力を高めることができる。

今回の実践事例では、グループワークから発表、相互評価を経てリライト、さらに相互評価、という流れで、常に自己と他者を意識させるように工夫した。その結果、アンケート結果に見られるように、自他の違いに基づいて根拠を明確にして自分の意見を深めることができている。また、発表での意見やリライトされた原稿から、伝え合う力が高まっている様子がうかがえる。

本研究では、短い期間での検証が必要なため、検証しやすい学習活動や教材を用いて伝え合う力の高まりを検証しているが、本来、「伝え合う力を高める」ことは高等学校国語の大きな目標でもあり、年間を通じた指導計画や3年間（4年間）を見通した指導計画の中で段階的に位置付けるべき学習活動である。

(3) 目的・相手・場面等の明確化、生徒の興味を喚起する教材の選定や補助資料の活用、学力向上への動機付けが可能となるような評価、などの工夫によって、生徒の学習意欲を向上させ、主体的な言語活動をさせることができる。

教材については、教科書内の知識の伝達ではなく、国語の授業を通して社会生活の中に“学び”の要素を求めるような題材を選ぶことができた。教科書教材を「読むこと」の題材とするだけでなく、「伝え合う力を高める」ための題材とし、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の題材として活用し、さらに、話題を多角的に深めていくために共通するテーマの補助教材を用いた。いずれも、生徒が今後も興味・関心を持ち続けられるテーマという観点で選定を行った。

検証授業での生徒の取組状況やアンケートに書かれている内容から、生徒は学習意欲をもって主体的に活動に取り組んだ様子がうかがえるが、教材だけで生徒の学習意欲を喚起することには限界がある。今回は「伝え合う力を高める」という目的に対して「言語感覚を磨く」学習活動を設定し、意見の交換が行いやすい話題としての教材を選定したが、教材の選定は指導事項や言語活動などその単元の学習活動全体から見て適切なものでなければならない。

2 実践事例の活用について

「仮説の検証」の中でも述べたが、今回の研究では「伝え合う力を高める」という大きな目標を短期間で検証する必要がある、検証しやすい学習活動や教材を用いて伝え合う力の高

まりを検証している。したがって、研究の成果をまとめるにあたって、その「汎用性」についても触れることができるよう研究を進める必要があった。

そこで、高等学校国語部会では、①一斉授業（クラス単位）への対応、②他の科目における指導、③言語活動と教材との関連、④生徒の実態と言語活動との関係、の4点から「汎用性」に関するアプローチを試みることにした。

(1) 一斉授業（クラス単位）への対応

個人個人に「他者」を意識させるという目的からすれば、本来は、一人一人での発表が理想的ではあるが、時間や教室の広さの問題を考えると現実的にはなかなか難しいものがある。今回の検証授業では、グループ内で相談したものを、代表者が前に出て発表するという形態を取った。対象が少人数クラスであったため、三分の一程度の生徒が発表することができ、グループも3人程度のため、黙って聞いているだけの生徒はいなかった。その結果、個人作業、グループでの話し合い、発表という段階を迫った授業展開が効率よくできた。

しかし、40人に対して一斉授業を行う場合には同じようにはいかない。「話し方」を意識するのは数人の発表者に限られてしまうという可能性がある。そのような課題に対応するには次の2点に注意する必要がある。

- ① 年間の指導計画に発表活動を位置付け、発表者が偏らないよう計画的に実施すること。
- ② グループの分け方を、「同じ意見同士」「異なる意見同士」「意見とは無関係」などテーマに応じて毎回工夫し、いつも同じメンバーということにならないようにすること。

どちらも、いかにして他者を意識させるかが重要であり、どのような形式をとっても、「これぐらいのニュアンスでも伝わるだろう」という馴れ合いや意識レベルの低下につながらないような工夫が必要である。授業や活動のねらいをしっかりと理解させた上で行うことが重要である。

(2) 他の科目における指導

今回の検証授業は「国語総合」で実施したが、「伝え合う力を高める」という目標は教科全体の目標であり、各科目にあってどのように取り組むかが課題となってくる。

例えば、「現代文B」は、科目の目標として「伝え合う力を高める」という文言は見られないが、指導事項のエ「目的や課題に応じて、収集した様々な情報を分析、整理して資料を作成し、自分の考えを効果的に表現すること。」などは、今回の実践事例をより高度にしたものである。新しい学習指導要領において「国語総合」以外の選択科目の目標は、教科の目標を受けた上で各科目の性格や特色に応じた目標を掲げている。したがって、科目の目標は教科の目標のどの部分を受けているのか、解説をよく読み、目標、指導事項、言語活動の関係を理解する必要がある。

(3) 言語活動と教材との関連

学習指導要領は、目標、指導事項、言語活動、教材、という流れで書かれている。これは、教材を教えることが指導の目的ではなく、目標を具体化したものが指導事項であり、指導事項を指導する上で適切な言語活動を行い、教材の選定はこの流れにおいてふさわしいものでなければならないということを示しているものだと考えられる。

今回の実践事例では、教科書教材を扱い、かつ教材のテーマを多角的に深めるために補助

資料を加えてワークシート等を作成した。教材を通して授業のねらいをどのように達成していくかは、どんな言語活動を取り入れるかによっても、その手順は異なってくる。以下に高等学校国語でよく取り上げられる教材と言語活動との関係を例として挙げる（単元の目標に応じて、更に様々な組み合わせや活動が考えられる。）。

科目	指導事項	言語活動例	具体的な言語活動
国語総合 現代文B	C-オ エ	C-イ エ	その作品に付随する知識を紹介する。（筆者の紹介、系統〔文学史を含む〕、出典〔典拠〕、参考文献、掲載部分以外の解説、同時代・同ジャンルの作品など）
国語総合 古典B	B-イ イ	B-ア ウ	物語の続き、教科書掲載にあたって省略された部分を考察する。
国語総合 現代文A	A-エ ア	A-ウ ウ	取り上げられたテーマについての「プラスとマイナス」「対応策」を考える。
国語総合 現代文B	B-ア ア	B-ウ ウ	例示されているものを、自分の経験に置き換える。
現代文B 国語表現	ウ ウ	イ ア	「筆者の論」について考える。（賛否・それに対する自分の主張）
現代文A 古典A	エ イ	イ ア	韻文（詩・短歌・俳句・川柳など）を鑑賞し、解説等を書く。
国語総合 現代文B	C-ウ イ	C-ア ア	登場人物の言動から心情心理を読み取る。（比喩・象徴・関係性の変化・布石等）
国語総合 古典B	A-ア ウ	A-ア エ	古典教材に出てくる思考・思想について、自分が共感できるものを紹介する。

(4) 生徒の実態と言語活動との関係

言語活動は、各学校の実態に合わせて設定された単元の目標及び指導事項に対して適切なものを取り上げることが望ましい。様々な支援が必要な生徒に対して高度な内容を要求すること、学習能力の高い生徒に対して簡易なテーマを与えることは、ともに生徒のやる気をそぐ結果になりかねない。それぞれの学力や生活環境に応じた配慮が必要である。その際、共通して留意すべき点は、生徒の実態を正確に把握すること、把握した実態に合わせて適切な目標を設定することである。

生徒の能力を高めるということは、今まで考えてもみなかったことを発見させることであり、その過程において、自らの経験にどう結びつけていけるかを考えさせることである。少し背伸びをしなければ理解できないような、少し背伸びをすれば到達できるような目標を設定し取り組ませることで、理解が深まった時の満足感や達成感を味わわせることができるのではないかと考える。教員には、生徒に一方的に授業内容を教え込むようなことをするのはなく、生徒が「背伸び」をうまくできるよう支援する力が求められる。

以下に挙げた言語活動例は、設定した単元の目標に合わせて実施する言語活動の参考になるように、具体的なものから順に抽象度が上がるように並べた。

科目	指導事項	言語活動例	具体的な言語活動
国語総合 古典A	C-ア ウ	C-ア ア	韻文のリライトを行い、発表する。（段落や形式はそのままに、使われている語句を変更する。）
国語総合 国語表現	B-ア エ	B-ウ エ	身近な設定の通知文を作成する。（学校行事の招待状を近隣の幼稚園や高齢者施設に出すなど）
国語総合 国語表現	B-ウ イ	B-イ ア	生徒手帳を参考に、授業者が提示したテーマでルールを作成する。
国語総合 現代文B	A-ア エ	A-ア エ	新聞記事を題材に、対象者を設定した上で説明を試みる。
古典A 古典B	エ ア	ウ ア	口語訳を比較する。（原文と口語訳、それぞれの訳者による言葉の違いなど）
現代文A 現代文B	ア ア	ウ エ	現代文（特に、評論）の頻出テーマに関わる知識を身につけさせた上で、それらに関する考察を行わせる。
現代文B 古典B	イ イ	イ エ	過去の大学入試問題を活用し、同じ文章が取り上げられているものを比較し、設問内容の違いを意識させ、出題者の意図を読み取る。

VII 今後の課題

1 系統的、横断的な指導について

言語感覚を磨き伝え合う力を高めるという当初の目標を、高校生活3年間（または4年間）の中で実現していくためには、各学校の実態に合わせながら国語科が主体となって計画を提示していく必要がある。まずは、国語科の授業計画について、今回のような試行的・研究的授業を含め、どのような指導事項をどのような言語活動で年間指導計画上にどのように位置付けていくかを各学校で検討する必要がある。

「言語感覚を磨き伝え合う力を高める」という目標を掲げ、それぞれの単元の導入時に、既習事項の復習や語彙力の確認ができるような授業を行い、まとめの段階で思考力・表現力が求められるような発展的な題材を扱うことを繰り返し計画的に実施していくことで、それらが学期単位、学年単位で積み重なれば、生徒に大きな変容が見られると考える。

また、国語科だけの指導で終わるのではなく、他教科との連携も重要である。国語科がどのような言語活動をいつ行うのかを他教科に発信していくとともに、他教科がいつどのような言語活動を行うのか、それは、どのような目標でどのような指導事項において行うのか、ということを知る必要がある。共通性のあるテーマや指導事項を教科の枠を超えて関連付けて指導すれば、そのテーマや指導事項について生徒の理解も深まり、主体的な学習への動機付けになると考える。

2 評価について

今回の実践事例では相互評価を2回行うことで他者を強く意識させるよう工夫した。また、相互評価を経て自分の文章をリライトする、という活動を通じて表現を磨く体験ができるよう工夫した。これらの活動によって言語感覚を磨くことにつなげようとした。

評価は、一つの学習活動の事前事後の生徒の変容を授業者がとらえるためのものとは限らない。評価したり評価されたりすることを通じて伸ばせる力もある。相互評価を言語活動の中に適切に位置付けることが重要である。

また、評価は授業改善につなげるものでもあるので、授業改善の視点を忘れずに入れながら学習活動とその評価の在り方について考えていくべきである。

3 国語科の果たす役割

はじめにも述べたとおり、新しい学習指導要領において国語科の果たす役割と責任は大変大きいものである。「国語力」とは、すべての教科に通じる学習の基礎であり、また、その基礎の上に更に学習を積み上げていくための「土台」となるべきものである。授業で学んだことがその場限りの学習で終わってしまうのではなく、「学びたい」という意識をもたせることが、あらゆる教科に対して主体的、継続的に取り組む動機付けになると考える。

また、すべての教科・科目で言語活動の充実が求められており、そのために、国語科における言語活動を他教科に向けて積極的に発信するとともに、他教科における言語活動について情報の収集に努め、それらを関連付けるための中核的役割を担うことも期待されている。

国語科の教員である我々は、これらのことを常に意識しながら日々研鑽に励まなければならないのである。

平成22年度 教育研究員名簿

高等学校・国語

学校名	課程	名	名
都立一 高等学校	定時	主任教	
都立 高等学校	全日	教	小
都立新宿高等学校	全日	主任教	理
都立 園高等学校	全日	主任教	内 直
都立多 高等学校	全日	主 教	中 志
都立 生高等学校	定時	主任教	

世話人

当 東京都教育 指導部高等学校教育指導課 指導主事 小

平成 22 年度
教育研究員研究報告書
高等学校 国語部会

東京都教育委員会印刷物登録

〔平成 23 年度第 46 号〕

平成 23 年 6 月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電話番号 (03) 5320-6836
印刷会社 有限会社 シーダー企画
住 所 東京都新宿区西五軒町 7-10
電話番号 (03) 5228-3451